

沖縄の昔話と病

今 林 直 樹

序に代えて一病と人間―

1. 病魔退散の昔話
2. 「もの言う牛」の昔話

結びとして一病と向き合う人間―

註

序に代えて一病と人間―

本稿は、沖縄に残る昔話を切り口に、「病と人間」との関わりについて考察することを主たる目的としている。

2020年はコロナ禍に翻弄された一年であった。人々は姿が見えないウイルスという、人類に災いをもたらす、また場合によっては死をもたらす存在に恐怖し、おののいたのである。

人類の長い歴史の中で、人類がこのような見えない病原体との闘いに苦しんだことは初めてではない。14世紀半ばの中世ヨーロッパでペストが大流行したことはよく知られている。それはペスト菌が人間の血液中に侵入して起こる病であるが、罹患すると全身の皮膚に紫の斑点や小さい膿胞が現われ、1週間以内で死に至るという恐ろしいものである。斑点や膿胞の黒さから「黒死病」とも呼ばれ、村上 [1983:126] によれば、史料に残された推定死亡率は、場所にもよるが50%よりもはるかに高いものが多いという。いずれにしても、ペストが大流行した結果、ヨーロッパの人口は激減したのである。村上 [1983:122] によれば、ヨーロッパ中世で大流行したペストは1348年に始まり、1370年頃に「ともかく一応の終息に達した」という。ペストの猛威が終息するまでに、20年以上も要していることになる（なお、酒井 [2013:270-273] によれば、日本で最初にペスト患者が確認されたのは明治32（1899）年のことである）。

酒井 [2013] によれば、日本でも人々は古代から現代まで風邪をはじめ、痘瘡、マラリア、コレラ、天然痘、梅毒、赤痢、麻疹、結核など、様ざまな病と向き合ってきたことがわかる。江戸時代後期から明治時代にかけて「コロリ」という名の伝染病が何度となく流行したことはよく知られている。発病してほどなく「ころり」と亡くなることから「コロリ」と呼ばれたその病の原因となったのがコレラ菌である。酒井 [2013:178-193] によれば、コロリが日本で最初に流行したのは文政5（1822）年のことであったが、その後も安

政5(1858)年、明治10(1877)年、明治12(1879)年と大流行し、多くの死者が出て、人々は恐怖のどん底に突き落とされたのであった。

目に見えない病原体がもたらす疫病が蔓延するとき恐怖を感じるのは21世紀に生きる人類もまた同じである。2020年の新型コロナウイルス感染拡大が続く中、アマビエが「発見された」ことは記憶に新しい。アマビエは疫病退散の効力を持つとされる妖怪である。よく取り上げられる史料は京都大学附属図書館に所蔵されている江戸時代の瓦版である。それによると、瓦版がアマビエの出現を報じたのは「弘化3年3月中旬」(1846年5月中旬)のことで、出現した場所は肥後国であることがわかる。瓦版に描かれているアマビエの姿は、髪が足元に届くほど長く、口は鳥のくちばしのようにとがっており、胴体には鱗のようなものが見える。先に「足元」と書いたが、実際には足はなく、魚の尾のような形状をしている。そのアマビエが「病が流行したら私を写して人々に見せよ」と言い残して海へ帰っていったという。

まさに人魚のようなその姿がキャラクター化されて、アマビエは絵や人形、さらには菓子の世界でも写されて人気を博している。幼稚園などでは園児たちが病魔退散の願いを込めてアマビエ人形を製作したというニュースもあった。また、そうしたアマビエの人気と人々の疫病退散の願いにあやかっか、宮城県北部のとある寺院では新型コロナウイルス感染が終息するように「アマビエ様」を安置開眼し、祈祷したり御朱印や御守りを販売したりして、多くの参拝客を集めているという。

では、沖縄ではどうであろうか。もちろん、沖縄も例外ではなく、これまでに何らかの病との闘いを経験してきた。そして、人々はその記憶を、先のアマビエ出現を報じた瓦版のように、昔話として語り継いできたのであった。それは必ずしも病気がもたらす生々しい症状を語るものではない。昔話という性格から、アマビエのような妖怪や擬人化された病魔の神々が登場するなど、むしろ非現実的な内容を含みつつ、人々が病とどのようにつきあってきたかを語っているのであり、呪文や祭祀儀礼的なものの成り立ちを語っているのである。

洋の東西を問わず、古来、人々はペスト菌やコレラ菌、新型コロナウイルスといった細菌やウイルスなどの見えない病原体がもたらす様々な疫病と向き合ってきた。もちろん、それが人々にとって苦しみであったことは言うまでもない。しかし、その一方で、人々はそこから様々な物語の世界を紡ぎだしてきた。それらを迷信や作り話として笑い飛ばすことは簡単なことであるが、そこに人々の病氣平癒への祈りにも似た気持ち、あるいは病魔への抵抗の気持ちが込められていることもまた確かなことである。昔話というのはまさにそうした世界を写し出す鏡の1つなのである。

以下、本稿は『日本昔話通観 26 沖縄』(以下『昔話沖縄』)に収録されている昔話を主たる資料として用いながら、関連する先行研究を踏まえつつ、沖縄の昔話に現れた病と人間との関わりについて考察していきたい。

1. 病魔退散の昔話

『昔話沖縄』には「病魔退散」として3つの話型が収録されている。すなわち、(1) 川渡し型、(2) 報恩型、(3) まじない由来型である。

(1) 川渡し型 (資料1-①参照)

この型は、老人の姿をした病魔の神が川を渡るために船に乗ろうとする場面から始まるためにこの名称がつけられている。

この話型は類話が4話収録されており、本編を含めて5話である(なお、病とは関係のない同型の参考話が1話収録されている)。このうち、1話を除く4話で病魔の神は「はしかの神」である。はしかは、麻疹ウイルスによって引き起こされる病であるが、感染力が強いため古くから非常に恐れられた。酒井[2013:239-240]によれば、江戸時代、はしかは「命定め」の病として恐れられ、文久2(1862)年には大流行して麻疹の邪鬼が入ってこないように、いわゆる「はしか絵」と呼ばれる錦絵が出版されたという。沖縄は海によって外部世界と切り離された島社会ということもあり、閉じた空間の内部ではしかのような感染力の強い疫病が流行すると大変なことになるということで、そうした疫病にはとくに警戒したであろうことは容易に想像できることである。

この「川渡し型」の話型に登場するはしかの神は、どこから来てどこへ帰って行くのであろうか。はしかの神の由来がはっきりしていないということは、はしかが外来の病ではなく土着の病であることを示しているのであろうか。そして、はしかの神が「川を渡る」ということは何を意味しているのであろうか。これらは「川」という舞台をどのように認識するかという問題とも関連する。すなわち、はしかを土着の病と認識するならば、はしかの神が川を渡ることによって、川は島の内部のあるシマ(集落)から別のシマへとはしかが拡散していく過程を表す象徴となっていると解釈することができる。すなわち、はしかの神の移動がはしかの感染拡大を意味するとすれば、川はシマとシマとの境界を示すものと理解することができるであろう。したがって、はしかの神を助けた男が、神からの恩返しとして本人とその家族や子孫がはしかにかからないようにしてもらおうというのは、男をシマを擬人化したものと考えれば、男が帰属するシマにはしかの感染が拡がらないようにすることにもつながるものと受け取ることができる。

(2) 報恩型 (資料1-②)

この話型は、類話が3話収録されており、本編を含めて4話である。この話型は病魔の神々を男が手伝うことによって恩返しを受けるというものである。その点では先の「川渡し型」と同じであり、その意味では「川渡し型」の昔話も「報恩型」にも含めることができる。「川渡し型」と異なっているのは、1話を除いて舞台が海辺であるということであることと、病が一定していないということである。「川渡し型」の病ははしかであったが、「報恩型」の本編では牛が罹患する疫病であり、類話では2話が風邪、1話が流行性感冒となっている。

舞台が「海辺」であるというのはどのような意味を持っているであろうか。先に、はしかの神が土着神か来訪神かはっきりしないと記したが、この話型では病魔の神々が島外からやってきていることは明らかである。そのことは、神々が島内では見ることがない「異様な姿」をしているということにも表わされているが、「神様の言いつけで来た」という1人の神を島の男が「豊作の神」と間違っ御礼を申し述べるといことにも現われている。すなわち、例えば、沖縄には「世乞い」「世迎い」「世界報」という言葉があるが、それらは、毎年、7月下旬から8月頃に開催される「豊年祭」という、島の人々が豊穡や幸をもたらしてくれるように海の彼方からやってくる神に祈る祭祀儀礼と結びついているからである。西表島の豊年祭に現れるミルク神などは代表的な来訪神である。昔話の舞台が海辺であるということは病魔の神が来訪神であることを示している。だからこそ、男は海辺で出会った神を「豊作をもたらす神」と間違っしたのである（なお、類似の話は（福田他編[2017:52-53]に「風邪の神の恩返し」として掲載されている）。

沖縄では、一般的に、来訪神と言えれば本来は外部世界からやってきて島に幸をもたらす存在であり、したがってこの話型にあるように島に不幸をもたらす存在を来訪神と呼ぶにはやや違和感があることは否めないが、この話型からは「災厄は外部世界から持ち込まれる」という基本的な認識枠組みを見て取ることができる。

また、この話型では神々を助けた恩返しとして自分の牛を助けてもらうが、その際に牛の首に注連縄をつけることと牛の額に「あきらんざ」という貝の一種を3個ずつつないでおくように言われる。この点は、次にみる「まじない由来型」の要素を持つものとして理解できる。類話でも「古網で縄をなつて七、五、三に糸結びをして門にかけ、にんにくを下げておけ」と指示したり「チビジナー（七五三の縄）を門に下げて、にんにくと塩を掛けておくように」などと指示したりしており、やはり「まじない由来型」にも分類できる特徴を備えていることがわかる。

なお、本編で疫病に罹患するのは人間ではなく牛である。なぜ、牛なのかという点については次章であらためて検討したいが、後述するように、「もの言う牛」にまつわる昔話の中にも七五三の注連縄に関する話もあり、様々な要素が混ざりあっているのがわかる。貝が呪物となっているのも注目すべき点であろう。

(3) まじない由来型（資料1-③、補足資料）

この話型は、類話が1話収録されており、本編を含めて2話である（なお、参考話が2話収録されている）。但し、先述のとおり、「報恩型」に分類されている話型にも「まじない由来型」の特徴を見て取ることができるものがあり、内容を丁寧に整理して分類することが必要である。

この話型では必ずしも神とは明示されておらず、病魔をもたらす存在は子どもの姿で現れる。しかし、類話で取り上げられている、竹富島に伝わるアールマイという男の話（補足資料参照）では病をもたらす存在はやはり神として描かれている。

この話型では未然に病から身を守るために、あるいは病を治すためにまじないをすることが語られており、それがその島の人々に世代を超えて語り継がれることによって、一つの習慣となっていくことが示されている。本編では腹痛を治すために「すくがらす」の汁を飲めばよいことが示されている。また、補足資料ではススキの葉の先を結ぶことと七五三の注連縄を張ることが病から身を守ることになるということが示されており、その後も「アールマイ ヌ ノールフキ」（アールマイの稔る茎）と唱えて農作物の豊作を祈り、注連縄を張って「ハナキ ヌ ニガイ」（病魔祓い）を行うようになったことが示されている。すなわち、それが竹富島で今日まで行われている病魔退散の習慣となったという由来を示すものとなっている。

なお、先の「報恩型」の類話で海辺を舞台にしないものは「ヨーラサー（夜鳥）の恩返し」というものであり、それは怪我をした夜鳥を助けたナーマヤー（長間家）の人に夜鳥が「ここには、必ず災難がやって来るから、臼と杵を出して『ナーマヤーヌウイドー、ナーマヤーヌリイピキドー、ナーマヤーヌツツドー（長間家の上だよ、長間家の血族だよ、長間家の屋根の頂だよ）』と言って、臼を3回打ったら、あなたの家には災難に遭わないから、そうしなさい」と言ったという話である。その後、その集落で火災が発生した時、長間家の人はその呪文を唱えて火災を免れたということで、夜鳥が鳴く時には災難が起こる前に各家々が呪文を唱えて臼を3回叩くことが習慣になったという（福田他編〔2017:55-56〕。この話は病に関するものではないが、「まじない由来型」の特徴を示すものとして収録されたのであろう）。

2. 「もの言う牛」の昔話

『昔話沖縄』には「もの言う牛」として4つの話型が収録されている。すなわち、(1) 賭け型、(2) 話の功德・賭け型、(3) 証言型、(4) 報恩型である。

同書には「もの言う動物」の昔話としては「牛」以外にも「亀」と「かたつむり」が収録されている。「もの言う亀」の話には、「賭け型」をはじめ「金ふり型」「成功型」「天の米蔵型」などがあるが、本稿のテーマである「病」とは関連がない。「もの言うかたつむり」の話は単編であり、やはり「病」とは関連がない。それらと比較して、「もの言う牛」の話は、類話の数が圧倒的に多く、「病」や「シマクサラー」といった祭祀儀礼と関連しているものが多い。その地理的範囲も沖縄本島から宮古諸島（多良間島）、八重山諸島（石垣島、与那国島）まで、すべての島々で語られているわけではないが、かなりの広範囲で語られている（「もの言う亀」の話は沖縄本島の国頭村と宮古諸島の伊良部島の話である。なお、「牛の島」として知られる八重山諸島の黒島の話は1話もない）。また、同書には「後生の牛」という、前世で人間であった男が来世で牛に生まれ変わるというヴァージョンの類型があり、その話の中で牛に生まれ変わった男が在世中の話を物語るなど、ヴァリエーションが豊かである。

これらのことを考えると、沖縄では牛はある意味で特別な動物であったと思われる。この点についての考察は別稿に譲ることとして、以下、「もの言う牛」の昔話について、「病」と祭祀儀礼の観点から考察していきたい。

(1) 賭け型 (資料2-①)

この話型は類話が12話収録されており、本編を含めて13話である。本編は宮古郡多良間村仲筋の話であるが、類話の取材地は石垣市宮良、中頭郡読谷村(比謝橋、渡具知)、那覇市(真嘉比、寄宮)、八重山郡竹富町(竹富、鳩間島)、八重山郡与那国町(久部良、祖内)となっており、この話型がかなり広い範囲で語られているのがわかる。本編の内容はやせた牛の元の飼い主と今の飼い主との間で行われた宝を賭けての牛どうしの鬪いの物語であり、「病」との関連はみられない。しかし、12の類話のうち3話(中頭郡読谷村の2話と那覇市真嘉比の1話)は「病」と関連している。「病」に関連する内容は次に見る「話の功德・賭け型」と大筋で類似したものとなっているので、それらの間にある差異も含めて後述する。

(2) 話の功德・賭け型 (資料2-②)

この話型は類話が5話収録されており、本編を含めて6話である。この話型では冒頭で2人あるいは3人の男たちが老人、先生あるいは主人から「お金を貰うか話を聞くか」選ぶことを求められるという点で(1)の「賭け型」と異なっている。「話を聞く」ことを選んだ男は、帰り道で「もの言う牛」と出会う。そして、男が聞いた話を思い出してそれをヒントに牛が勧める宝を賭けた鬪いに勝って金持ちになる。そのため、分類上、「話の功德」とついているのであろう。その部分では「病」との関連は見られない。

この話型が「病」と関連するのは話の末尾である。本編で確認できる「病」との関連は次の2点である。すなわち、①牛の肉を食べた人は風邪をひかない(病気になる)、②牛の血を染み込ませて縛った左縄は疫病が入り込むことを防ぐ。とくに、②については、本編の末尾にあるように、「シマクサラー」と関連している。この点は「病魔退散」の昔話として取り上げた(2)(3)の内容と同様である。

シマクサラーとは、渡邊他編[2008:254]によれば(但し、項目名は「シマクサラシ」、本稿では「シマクサラー」で統一する)、「疫病や風邪、悪霊がムラや家内に入らぬよう行われる行事」であり、「神役が御嶽に線香と花米をお供えして拝み、さらに動物(牛・馬・山羊・豚など)を屠り、汁にして共食する。またワラ縄をなつてその血で染め、外から災厄が入らぬようにムラの入り口に張ったり、屋敷の四隅に吊す。縄に屠った動物の骨を吊す地域もある」という。

かつて、筆者は宮古島の島尻地区に残る奇祭「パーントゥ」について調査したことがあるが、「パーントゥ」においても行事の開催にあたって「ミーピーツナ」と呼ばれる縄が用いられる。それは「スマツサリ」という厄祓いの行事のときに、災厄が集落内に入らないように、あるいは集落から追い払った災厄が戻ってこないようにとの願いを込めて、集

落の境界に豚の骨を張った縄のことである。このような縄を張って結界として災厄の侵入を防ぐという祭祀儀礼は沖縄の各地に見ることができる。

なお、先に「畠にさす結びススキの話」でみたように、ススキの葉先を結んだものを沖縄では「ゲーン」とか「サン」と呼ぶが、これらは「ヤナムン」という、人々に病やけがなどの災厄をもたらす存在から身を守るために用いられるものである。その他にも、先述した「あきらんざ」にもあったように、シャコガイやスジガイ、クモガイなどの貝類も「呪物」とみなされ、門に飾られてやはり厄除けといった除災機能を持つと考えられてきた。今日でも沖縄では家々の門に貝殻が乗せてあるのをよく目にすることができる（ゲーンや貝、その他の「沖縄のムンヌキムン」については山里[2017:82-92]を参照のこと）。

このようにみえてくると、沖縄では様々な方法で集落に災厄が入ってこないような祭祀儀礼が発達してきたことがわかる。裏を返せば、それは、島社会という閉じた空間における疫病の発生が島民にとっていかに恐ろしいものであったかを示すものであると考えられるのである。人々は何とかして島での疫病の流行を防ぎたいと思い、自然の中にそれを避けるヒントがあると想着て、それを昔話の中に盛り込んだのである。今日でも牛肉を食べることが健康維持のためにも必要であることは言うまでもない。人々は生活から得られたそうした経験値の積み重ねから「牛を食べることが病を遠ざける」ということを認識していた。人々はそれを「牛の除災機能」と考えたのではないだろうか。「牛」が多く取り上げられている背景には、そのような認識があったのである。

なお、(1)の類話では、(牛を)「『十字路』に連れて行って殺すように」と牛が語っている。この「十字路」には何か意味があるのかは検討すべき問題である。沖縄で見られる「石敢當」は「ヤナムン」が集まる空間とされる「三叉路」(Y字路なども含む)に魔除けのために置かれるものである。また、ヨーロッパでも「十字路」はアジュールとしての機能をもつとされる一方、十字路に面したところに、おそらく魔除けの機能を持つと考えられる「マリア像」が置かれるなどの事例がある。このように、洋の東西を問わず、三叉路や十字路は「特別な意味を持つ空間」と考えられていたのであろう(石敢當やフーフダについては山里[2017:22-81]を参照のこと)。

(3) 証言型 (資料2-③)

この話型は類話が2話収録されており、本編を含めて3話である。この話型は、ある子供の身体に牛の角の模様があることを牛が証言するというものである。証言に際して、牛が、先述のとおり、牛の肉を分け与えて食べ、血や肉をシマクサラーとするように語る場所に「病」との関連がうかがえる。

(4) 報恩型 (資料2-④)

この話型は類話が2話、参考話が1話収録されており、本編を含めて4話である。この話型では助けられたことによる牛の恩返しが話のテーマであり、「病」との関連はみられない。

結びとして一病と向き合う人間—

以上、『昔話沖繩』に収録された「病魔退散」と「もの言う牛」の話をもとにして「病と人間との関わり」について考察してきた。古来、人々は様々な「病」と向き合ってきた。繰り返しになるが、沖繩は閉じた空間である島社会であるために、疫病が大流行しても逃げ場がなく、もはや「死を待つしかない」という状況に追いやられることもしばしばであったと思われる。島の人々にとって、目に見えない「病」が流行することはどこよりも恐ろしいものであったであろう。

しかし、人々は病と向き合いながら、その災厄を回避するためにどうすればよいのかを必死で考えて「牛肉を食すれば病は遠ざかる」「牛や馬、豚などの血や骨が疫病の侵入を防ぐ」といった内容を持つ昔話を作り上げてきた。それはたしかに作り話であり、今日からみれば荒唐無稽なものである。しかし、島に生きる人々は疫病が目に見えない不気味な存在であればこそ、恐れおののき、どうすれば疫病に罹らずに済むのかを考えるとともに、牛や馬、豚の中に「生きる力の源」を見出し、日々の生活の中での自然との関わりの中でスキの葉や貝殻に救いの目を向けたのである。

21世紀に生きる人類にとっても、目に見えない疫病との闘いは過去のものではなく、常に現在進行形であろう。病との闘いを通して、人類は新しい何を生み出すことができるであろうか。2020年に世界中を大混乱に陥れた新型コロナウイルス感染症との闘いは、感染者や医療従事者への誹謗中傷や差別、その起源をめぐって交わされた国家間の非難合戦など、人間の中に潜む「闇」を暴き出した。

果たして、人類は人類の未来を紡ぎ出すことができる新たな「物語」を作り出すことができるであろうか。

参考文献

- 『日本昔話通観 第26巻 沖繩』 [1983] 同朋舎。
今林直樹 [2020]「宮古島烏尻のパーントゥ」『地域の構築・記憶・風景—沖繩・プルトーニュー・バスター—』 晃洋書房。
鬼頭宏 [2010]『人口から読む日本の歴史』 講談社。
酒井シヅ [2013]『病が語る日本史』 講談社。
原田信男・前城直子・宮平盛晃 [2012]『捧げられる生命 沖繩の動物供犠』 御茶の水書房。
福田晃・藤井佐美・石垣博孝・山里純一・石垣繁編 [2017]『琉球の伝承文化を歩く4 八重山・石垣島の伝説・昔話 (2) —登野城・大川・石垣・新川—』 三弥井書店。
宮平盛晃 [2018]「防災儀礼における人々と来訪神による除災行為の比較—沖繩のシマクサラシ儀礼とパーントゥを事例に—」『沖繩文化』 第51巻2号。
村上陽一郎著 [1983]『ペスト大流行—ヨーロッパ中世の崩壊—』 岩波新書
山里純一 [2017]『沖繩のまじない 暮らしの中の魔除け、呪文、呪符の民俗史』 ボーダーインク。
渡邊欣雄・岡野宣勝・佐藤壯広・塩月亮子・宮下克也編 [2008]『沖繩民俗辞典』 吉川弘文館

「沖縄の昔話と病」(資料)

1. 病魔退散の昔話

1-①川渡し型

塩屋(大宜味村)のある農家の人、渡し場で、そこに年寄りがいらっしやっただので、かわいそうに思って、その人を渡しなさって、(また)船から下りる時は、おんぶして、陸にあげてやりなさった。(すると)「おまえは、どこの(者)か、」と言ったので、「私は、どこそこの誰ですよ」と言ったので、「よし、私は、実ははしかの神だから、おまえ達の子や孫は、はしかにかからさないでおこう」と言う。

それからすぐ、その家は全員、はしかにかかることはないそうだ。

(国頭郡国頭村辺土名・男)

1-②報恩型

波照間の本比田という男が夜漁をしようと浜に行くと、異様な姿をした人たちが舟を浜に上げている。男が「遭難したのか」と問いかけると、一人が「神様の言いつけで来た」と言ったので、男は豊作のお礼を言って、「今年も豊作にしてくれ」と砂の上にひれ伏す。神様の使いは「私たちは幸せの神ではなく、不幸せの神の使いで、波照間の牛に疫病をはやらせて牛を殺しにきたのだ」と言い、男が「やめてくれ」と頼むと、「お前は親切で心がけがいいから、お前の牛だけ助けてやる。牛を一か所に集めて首にしめ縄をつけ、額にあきらんざ(貝の一種)を3こずつつないでおけ」と言う。男は急いで家に帰り、言われたとおりにすると、島の牛はみな死ぬが、男の牛だけは一頭も死なずに助かった。それから牛の病気がはやると、男がやったようにして厄払いをする。

(石垣市登野城・男)

1-③まじない由来型

シュンという物知りが夜、親しい女の人を訪ねていく途中で子供に出会い、「どこに行くのか」と尋ねると、子供は「砂川で女が腹痛で苦しんでいて、家族がシュンに治し方を教えてもらいに行こうとしているので、先まわりをしてシュンの家に行くところだ」と答える。シュンが「なぜか」と聞くと、子供は「女の腹痛は私が腹の中に入っておこしており、カニクバ笠(鉄くば笠)をかぶっているので、お灸をすえても平気だ。シュンがどうやって治すか知りたいので、シュンの家に行くのだ」と答える。シュンが「では、どうやったらお前は困るのか」と尋ねると、子供は「すくがらす(小魚の塩辛)の汁を飲まされると、腹の中で溶けて膿になって流れてしまう」と答える。シュンはその女の家に行くと、使いを出して家からすくがらすを持ってこさせ、隠れて子供が現わ

れるのを待つ。子供が現われ、女が腹痛で苦しみますと、シュンはすぐがらすの汁を飲ませたので、女は腹痛が治った。

(宮古郡上野村大嶺・男)

2. 「もの言う牛」の昔話

2-①賭け型

金持で財産家の百姓が、やせた牛に、七尋の長縄をつけて、野原につないだまま、すこしもかまわず、すてっぱなしでいたらしい。こんな日が、たびたびあったようだ。あんまりひどいよね。そしてね、大変思いやりのある人が、そのやせた牛を見て、「ほんとかわいそうだ」といって、つなぎ場をかえて、草のある所で食べさせたりしていた。やせ牛は、毎日感謝して、いつかは、この人に恩返しをしなければいけないと。

ある日、その人に言うには、「私を今の飼い主から買って下さい。私はあなた様にご恩返しをしたいから、そして私を買われてから、十日ぐらいになったら、もとの飼い主の薄情な人の家には、大きな肥えた牛がいるから、その牛と私とたたかわせ賭けて下さい」と。飼い主は、早速行って申し込むと、もとの主は、「あんな骨のざらざらした奴が、私の牛に勝るとでも思っているのか。うん、よろしい。そんなら大きな賭けで行く。何くそッ、では家一ぱいの宝を賭けては、どうか」と。飼い主も「よろしい」と言った。しかしもとの主は、飼い主への借金が昔からあったらしい。これが元主の弱みであったようだ。約束のその日が到来した。それではと飼い主は、一升ますを自分のやせ牛の両角にさげて、カラカラと鳴らしながら、行ったところが、それを見たもとの主は、「こん畜生、この野郎、わざわざ一升ますを持ちながら借金とりに来たな。闘牛を申し込んでおきながらこれはなんだ。よし、そんなら追い出してやろう」と、棒を持って暴れているうちに、そこの肥えた牛もやせた牛の両角のかっこうを見てたいそうびっくりし、小屋の中から縄を切るとび出して、悲鳴をあげて、やせた牛に追いかけて、どんどん逃げて行った。それでもとの主はこのぶざまな様子を見て、「ほんとうに、私が悪かった。こんなになろうとは思わなかった。こうなったら、君の言う通りにしよう」と飼い主に、約束通り、たくさんの宝を贈った。また借金の方も支払い、飼い主はやせた牛と幸福な生活を送ったそうです。

そこでね。昔から、牛や馬の綱がもつれていたら、たとえ誰の牛だろうと、馬だろうとこれを解き直し、出来るなら草のある広場につないで置くと、神様が見ておられたとのことです。

(宮古郡多良間村仲筋・男)

2-②話の功德・賭け型

(前略)

また、うしましからくいという言葉をもらった人が歩いていると、野原に牛が長い鼻綱をつけて、そして巻きつけられていた。「ああ、これなんだな、うしましからくいというものは」と見つめて立っていると、牛が、「おい」と言う。「なんだ」と言うと、「私の言うことを聞いてくれるか」と牛が言う。「ああ、よいことであれば聞こう」と言う。「むこうにある瓦ぶきの家、金持ち、あれは、元の私の主人なんだがな、もう若い間は鞭を当ててこき使い、金儲けをしているのに、年にとって仕事が出来なくなったものだから、雨に濡らしたり、日に照らしたりして、ひもじい思いをさせているのだから、むこうへ行って、牛がものを言うよ、と言いなさい。そうするとむこうの人は悪い人間だから反抗するだろう。その人は今、人手を欲しがっているので、牛がものを言わないのであれば、私は一生涯この家で使われよう。そして、言うのであれば、あんたは着のみ着のままでその家を出ることにしなさい」と言った。牛の言うとおりにすると、「ん、それでよい」ということになって、「二人だけではどうしようもない。(誰か)立合いする人はいないか」と。丁度隣に良い人がいたので、その人をお招きして立ち合わせると「うん、その程度のことならしよう」とその人はおっしゃって、立ち合うと、「はい、連れて来なさい」と言って、連れて来て、広場に入れると、なかなかものを言わない。「どうして、約束したのにものを言わないのだ」と。「ああ、この家は元の主人だから、しらふではダメだから、あんたの風呂敷を持って来て被せてくれ」と言うので、被せてやると、「悪人の、あんたは私が若い間はこき使っていて、年とってしまうと、このようにひもじい思いをさせて。ここの儲けは私のものだから、今すぐ出て行きなさい」と言って、牛に追い出された。

そして、その牛は神様として新しい主に崇められた。「ああ、何をやるんだ」と牛が言う。「あんたを神として崇めよう」と言う。「私は元の家(場所)を片づけて、ひもじい思いさえさせてくれなければそれで大丈夫だから、ここで飼ってくれ」と言った。「そのようにして飼ってよいのか」と言って、そこで飼って、肥ったので、長い間飼って肥ったので、「ああ、もう私をそんなに長い間飼ってはいけないから、殺して、道に連れ出して、通る人々に差し上げなさい」と言った。「ああ、私たちには殺せない」と言うと、「それでは、村中の人たちを集めて、殺し、辻に出して通る人々に食べさせて、また木の葉に血をつけて、左縄で巻きなさい」と言う。そして、そのようにすると、その牛は、「後々、私は生まれ変わってくるから、男を寄せつけない女が懐妊することがあると、それは私の子だから、幾分なりとも分けてやって欲しい」と、遺言だったんだな。

そのようにすると、それを食べた人は、今は風邪とっているが、昔はフーチとって、風邪返し、熱返しとって、別の島では、それが流行って多くの人々が助からな

かったが、それを食べた人々は、どうということはない。そのために、津堅や勝連や与那城では、シマサクラ、またジョウウマチーとも言うが、これをするようになった。風邪除けとしてね。

(中頭郡与那城村津堅・男)

2-③証言型

国頭の女が首里からの帰りに日が暮れ、泊めてもらった家の男の子を宿し出産する。女が子供を連れて男の家に行き、「火の神を拝ませてくれ」と頼むが、男は「自分の子供ではない」と言ってことわる。男と女が言い争っていると、男の家に飼われている牛が「その子の体に牛の角のあとがあったらあなたの子だ」と言う。男が子供の体を調べると、牛の角のあとがあったので、男はどうしても自分の子供だと認めないわけにいかない。怒った男は牛を売ろうとするが、人間の言葉がわかる化け牛だと買い手が見つからないので、山の木に鼻綱を結んで帰る。ある男が山へ草刈りに行くと、人間の声がし、見まわすと牛が男を招くしぐさをしているので、驚いて逃げ帰り、持ち主の男にその話をする。男が仕方なく牛を連れもどすと、牛は男に「私の肉と骨を近所の集落に分けて血を塗ったり、骨をさしたりして集落の入り口に吊しておきなさい。そうすれば家畜や人間の疫病を防ぐことができる」と言った。

(中頭郡読谷村座喜味)

2-④報恩型

よく働く正直者が、畑に行く途中でつながれている牛と馬を見つけると、水を与えたりしている。一匹の牛の主がいつまでも現れないので、男が自分の家に連れ帰っていたわっていると、牛が「あなたの行為は尊い。丘の私が印をつけた所を掘れ。出てきた物は恩返しに与える」と言う。男が言われたとおりに掘ってみると、金、銀、珊瑚が出てきて裕福に暮らせた。

(石垣市宮良・男)

補足資料

「島にさす結びススキの話」

昔、竹富島にアールマイと言う男がいた。この男は海が好きで、島仕事の合い間には海に出て魚を獲るのがならわしであった。

ある晩のこと、アールマイは夜釣りに行き、沖で魚を釣っていると自分の目の前に舟が現われ、舟人から付近の港口を教えてくださいと声をかけられた。アールマイがこの舟は何のためにこの島に来たのかとたずねると、「私は病魔の神である。舟いっぱい病気の種を載せてきたのだ。この島の出入港口を教えてくださいれば、その御礼にあなたの島に蒔

く農作物だけは特別に実らせてやるから、あなたの島にはススキの葉の先の方をひと結びに結んで目印にしておき、あなたの家の門には七五三の注連縄を張っておきなさい。そうしたらあなたの所にだけは病の種を入れないから」と、病魔の神がアールマイに答えた。

アールマイは病魔船に遠廻りの船着場を教え、自分は一足先に村に帰り、途中の道の両側にある村人たちの島に結びススキを差しつつ村に上り、村の入口には七五三の注連縄を張って病魔の神を村内に入れないようにした。アールマイのおかげで、病魔神は竹富島に厄病をまき散らすことができずに、その舟はそのまま島を去った。

それ以後、竹富島ではアールマイの教えとして農作物の種子蒔きをした時に、結びススキをし、また島には「アールマイ ヌ ノールフキ」すなわち「アールマイの稔る茎」と唱えて農作物の豊作を祈ることにした。さらに、「ハナキ ヌ ニガイ」（病魔祓い）には、村の入口ごとに注連縄を張って魔祓いの祈願をした。

このアールマイの教えから始まった習慣は、現今まで行われている。

（上勢頭亨『竹富島誌 民話・民俗篇』法政大学出版局、1985年）